ARTS & ARCHIVES

出品目録

i …5/31～6/6　ii …6/7～8　iii …6/10～29　※ i ・ iii は資料小展示として展示。なお月曜休館。

Ⅰ	防長古器考	請求番号	i	ii	iii
1	防長古器考総目録ほか	防長古器考1ほか	○	○	○
2	楠正成像	防長古器考7	○	○	○
3	大内義興馬上像	防長古器考77	○	○	○
4	扇之地紙武者絵	防長古器考24	○		
5	唐錦	防長古器考69	○		
6	村上武吉過所旗	村上家文書34		○	
7	村上武吉過所旗(船験小旗之図)	防長古器考30		○	
8	山内家伝指物(古制旗)※写真	山内家別箱-573		○	
9	山内家伝指物(古制旗之図)	防長古器考16		○	
10	御家来中古物之覚	16叢書45		○	
		多賀社文庫323		○	
		福尾猛市郎収集史料12		○	

Ⅱ	防長風土注進案	請求番号	i	ii	iii
11	能面	風土注進案(旧藩)268		○	
12	能面 ※写真	―		○	
13	赤穂義士の頭巾	風土注進案(旧藩)255		○	
14	赤穂義士の頭巾 ※写真	―		○	
15	頭巾（唐人モノ）	防長古器考38		○	

Ⅲ	美術よもやま話	請求番号	i	ii	iii
雪舟筆「山水長巻」模写					
16	公儀事諸控	41公儀事7(37の16)		○	
17	「山水長巻」模写本 ※写真	―		○	
18	雪舟筆「山水長巻」※複製	軸物類91		○	
老中松平定信の「平家物語」写本懇望					
19	諸事少々控	31小々控17(74の28)		○	
20	密局日乗(寛政5年12月8日)	19日記18(129の35)		○	
21	紙本墨書平家物語(長門本)※写真	―		○	
萩焼のルーツを考える新出史料					
22	伊秩采女正書状	遠用物近世前期441		○	
23	御留守居所日記(天和2年10月2日)	19日記7(22の9)		○	
下松多聞院「星宿図」開帳の記録					
24	御蔵本日記(宝暦8年2月6日)	御蔵本日記438		○	
25	星宿図 ※写真	―		○	

Ⅳ	現代の美術工芸品調査	請求番号	i	ii	iii
26	毛利家歴史資料目録ほか	図書028Y00ほか		○	

Ⅴ	文書館所蔵の絵画資料	請求番号	i	ii	iii
27	大庭学僊自画像	軸物類91		○	
28	四季耕作図屏風	安部家文書1526		○	
29	天保六年夏虫干諸道具控	安部家文書997		○	
30	鞍馬蓋寺縁起絵巻	清末毛利家文書302		○	

〒753-0083山口市後河原150-1　TEL/FAX　083(924)2116/2117　http://ymonjo.ysn21.jp/

ARTS & ARCHIVES

Ver.1.1

美術とアーカイブズ

古文書に見る防長の美術工芸品

展示解説書

雪舟・雲谷派の絵画や萩焼は、山口県を代表する優れた美術工芸品です。当館所蔵資料には、これら美術工芸品の由来やエピソードを物語る文書が数多く含まれています。

今年のアーカイブズウィークでは、「防長古器考」など当館所蔵資料のなかから、本県ゆかりの美術工芸品の歴史を振り返ります。この機会に、美術とアーカイブズの意外な出会いを体験してみませんか。

山口県文書館

Ⅰ　防長古器考

安永3年(1774)に完成した「防長古器考」161冊は、萩藩が領内規模で行った美術工芸品調査の代表例です。調査対象は藩士・社寺を中心に210家に達します。多くは精密な図入りで大変美しく(写真1)、一部は彩色も施されています。調査された美術工芸品の多くは現在では失われており、その意味で非常に意義深い美術工芸品調査報告書となっています。図は萩藩御用絵師雲谷等叔、編者は小笠原長鑑ほかです。

「防長古器考」の中でもっとも多く取り上げられているのが刀剣や甲冑などの武器・武具類で、そのほか幟旗類も対象になっています。そうした幟旗類の中に、当館が現物を保管している例があります。

「村上武吉過所旗」(村上家文書34、写真2)は、中世村上水軍の旗として有名なものです。「上」と大書され、天正9年(1581)の年紀および「武吉」の署名と花押があるこの旗は、「防長古器考」に図入りで「船験小旗」として収録されています。

また山内家文書573に「古制旗」と称されるものが残されています。上部に三社と二天が書かれていますが、下部は損傷が著しく、現在では文字の判別が困難です。しかし、「防長古器考」により、山内家の家紋「一」が描かれていることがわかります。

館蔵資料の中には、「防長古器考」とよく似た別の調査書も存在します。「御家来中古物之覚」と題書されるもので、毛利家文庫16叢書45のほか、多賀社文庫323と福尾猛市郎収集史料12にもあり、江戸時代、古物愛好趣味が一定の拡がりを見せていたことがわかります(写真3)。調査対象は40家で、うち34家が萩藩士で占められています。図は付随しない文章だけのものですが、記載項目の多くは「防長古器考」と重なっています。成立年代は「防長古器考」より一世代ぐらい後のものと考えられ、ごく一部は「防長古器考」に載らないものも含まれています。

写真2　村上武吉過所旗

写真3　御家来中古物之覚

写真1　防長古器考

Ⅱ　防長風土注進案

地誌として名高い「防長風土注進案」(県庁伝来旧藩記録、19世紀後期成立)にも、美術工芸品の図が掲載されている場合があります。例えば、正八幡宮(山口市)の能面12面(山口県指定有形文化財・県立山口博物館寄託)や赤穂義士の頭巾(写真4)などです。

前者は、「文明」「延徳」という15世紀後半期の年紀銘や作者銘が記されており、地方作の能面として貴重な美術工芸品です。後者は、由来は不明ながら、当時山口町人の安部家に伝来していたものです。

写真4　赤穂義士の頭巾
(防長風土注進案)

Ⅲ 美術よもやま話

その1

雪舟筆「山水長巻」模写

毛利博物館(防府市)には、国宝として有名な雪舟筆「紙本墨画淡彩四季山水図」(「山水長巻」)とともに、その模写本が所蔵されています。ひとつは、国宝の附指定で萩藩御用絵師雲谷等顔(1547－1618)筆と伝えられているもの、もうひとつは、享保10年(1725)、幕府御用絵師狩野古信(栄川、1696－1731)が模写したものです。古信の模写本は、落款まで写し取られた見事な出来栄えです(写真5～7)。この模写本は、大正5年(1916)12月、現萩市出身で日立製作所の創設者、政友会総裁も務めた久原房之助(1869－1965)から毛利家へ毛利邸の新築祝いとして献上されました(写真8)。

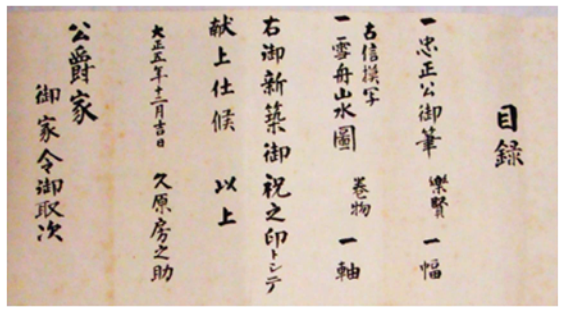
「公儀事諸控」(毛利家文庫41公儀事7(37の16))には、古信筆「山水長巻」模写本が作成された様子が詳しく記されています(写真9)。

享保9年(1724)、8代将軍吉宗は、狩野古信に命じて諸大名が所持する「古き絵」を模写させました。萩藩もいずれ指示があるものと予想し、事前に古信へ問い合わせるなどして情報収集に努め、所蔵する古い絵画を江戸藩邸に運び込んでいましたが、「山水長巻」だけは秘蔵の宝物として萩に残していました。しかし、翌年4月、「山水長巻」も江戸に取り寄せるべしと命ぜられ、急遽、運搬されることになり、安全を期して萩からすべて陸路が使われました。

江戸藩邸に搬入された「山水長巻」は、「大切之物」として日々萩藩士が古信宅へ持ち運び、11月3日から24日まで模写作業が行われました。完成した25日、古信自身が萩藩邸へ完成のあいさつに行き、自身の模写本を披露して帰りました。将軍吉宗も出来栄えを大いに気に入り、古信に奥書を書かせ表装もさせたといいます。

翌年5月、「山水長巻」は再び特別便で萩へと戻されました。

写真5　山水長巻模写本



目録
一忠正公御筆　樂賢　一幅
右信撰写
一雪舟山水圖　巻物　一軸
右御新築御祝之印トシテ
献上仕候　以上
大正五年十二月吉日　久原房之助
公爵家
御家令御取次

写真8　毛利家宛の献上目録

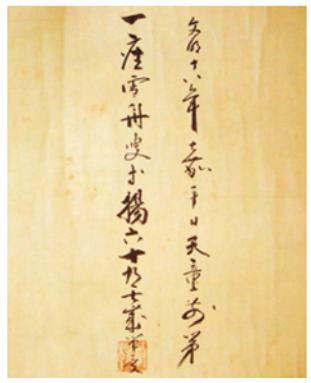


写真6　模写された落款(印も含む)

写真9　公儀事諸控

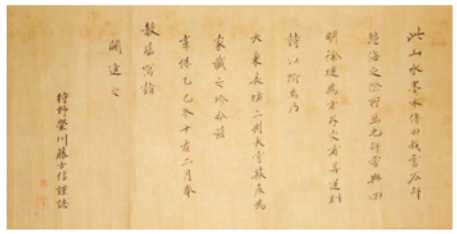


写真7　模写本の奥書

その2

老中松平定信の「平家物語」写本懇望

寛政の改革で名高い幕府老中松平定信(1758－1829)は、諸大名に名筆・尊筆の古額や什物の古書類を提出させるなど、古物趣味を持つ大変な文化人でした。

「諸事少々控」(毛利家文庫31小々控17(74の28)、写真10)のなかに、この文化人としての定信に関するエピソードが記されています。定信が、下関の赤間神宮(当時は阿弥陀寺)に伝わる「平家物語」20冊(現在重要文化財)の写本を懇望し、寛政6年(1794)年7月に進呈させたというものです。萩城内で写本作業を行ったのは、三田尻中船頭の吉武多熊という人物です。彼の経歴については、詳しいことはわかっていません。

その3

萩焼のルーツを考える新出史料

萩焼(松本焼)発祥からまだ間もない、寛永元年(1624)頃のようすを伝える興味深い書状が、毛利家文庫・遠用物近世前期441に残っています(写真11)。そこには、焼物師二人の名付けに、毛利輝元(宗瑞)とその嫡男で初代萩藩主秀就、および長府藩主毛利秀元が関わっていたこと、また、焼物師が「異国人」であることが明記されています。

「御留守居所日記」天和2年(1682)10月2日の条には、松本窯では萩毛利家の御用だけではなく、一門や吉川家、長府毛利家の御用も同時に果たしていたことが記されています。

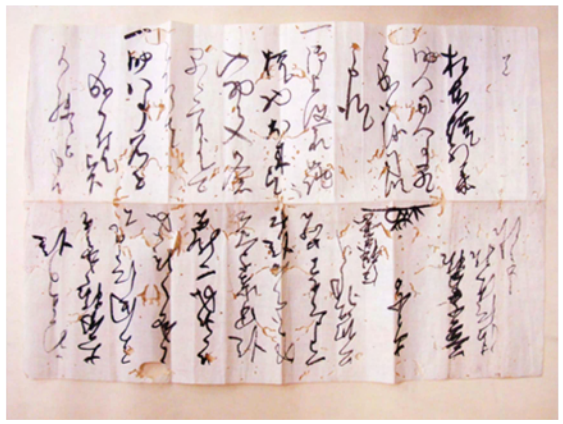


写真11　伊秩采女正書状

写真10　諸事少々控

ARTS & ARCHIVES

その４

下松多聞院「星宿図」開帳の記録

下松市の多聞院が所蔵する「星宿図（寺伝須弥山図）」（山口県指定有形文化財）は、用途がはっきりしない謎の美術工芸品です。高さ約50cmの五段組立造り円筒形で上4段は回転でき、各段に十二宮や二十八宿などが描かれています（写真12）。

江戸時代、凶作悪年がうち続く延享3年(1746)寅年に、五穀豊穣を祈念して星宿図を開帳（一般公開）したところ、満作に恵まれたため、このあと寅年ごとに開帳するようになったというエピソードが、徳山毛利家文庫「御蔵本日記」（宝暦8年2月6日条ほか）に記されています（写真13）。

写真12　星宿図（多聞院蔵）

写真13　御蔵本日記　宝暦8年2月6日

Ⅳ 現代の美術工芸品調査

美術工芸品の調査は現代も行われています。県教育委員会は、萩藩主毛利家・徳山藩主毛利家・岩国藩主吉川家・萩藩永代家老益田家・周防国分寺などの所蔵先ごとに、また、石造物・絵馬・中世文書などテーマごとに調査を実施し、その成果を報告書にまとめるとともに、文化財指定を図るなど文化財愛護普及の役割を担ってきています（写真14）。

写真14　毛利家歴史資料目録ほか

Ⅴ 文書館所蔵の絵画資料

写真15　大庭学僊自画像

徳山生まれの大庭学僊（1820－1899）は、徳山藩御用絵師朝倉震陵（1798－1871）に師事し、のち萩藩御用絵師小田海僊（1784－1862）の門をも叩いた絵師で、山水花鳥画を得意としました。当館に彼の自画像（写真15）などが残されています。

「四季耕作図屏風」は8曲1双の大作で、長府藩御用絵師笹山養意の作品です（写真16）。山口の町人安部家に伝わったもので、天保6年（1835）同家の道具帳（安部家文書997）にも記載されています。この屏風は、毎年正月、地主まつりの際に飾ったものといわれています。いきいきした庶民描写が魅力的です。

写真16　四季耕作図屏風（左隻）

京都北方にある鞍馬寺（鞍馬蓋寺）の縁起を絵巻形式であらわしたのが「鞍馬蓋寺縁起絵巻」（清末毛利家文書302）です。原本は火災で焼失してしまいましたが、江戸時代の模本が清末藩主であった清末毛利家に残り、現在、当館所蔵の清末毛利家文書として伝来しています。奥書には、永正10年（1513）の年号がみえ、また、詞書を青蓮院准后が書き、絵を狩野元信が描いたことが記されています（写真17）。なお、清末毛利家文書には同様の模本類が他にも数多く伝来しています。

写真17　鞍馬蓋寺縁起絵巻